● 研究ノート ●

モダニスト的理想と余剰
William Faulknerと二つの世界大戦[1]

麻　生　享　志

Residues of Modernist Ideals: William Faulkner's *A Fable* and Two World Wars.

Takashi ASO

Abstract

Critics argue that the fictional world that William Faulkner has created in a series of "Yoknapatawpha" stories is nothing but perfect, for, as Koichi Suwabe points out, "everything is there where it should be," as most typically seen in *The Sound and the Fury* (1929). There is, however, what I would like to call "residues of modernist ideals" in his later works where things go astray. Most typically, *A Fable* (1954) is a story where characters' pacifist ideals will never be successfully realized. Though apparently demonstrating his appeal for pacifism in the novel about the Great War where a French corporal, a sort of Chirist figure, goes against the military order, Faulkner writes the book in order to show that "pacifism does not work."

In fact, Faulkner's purpose in writing *A Fable* is, as the writer himself argues in "A Note on *A Fable*," is to illustrate that "the men who do not want war may have to arm themselves as for war," which echoes Woodrow Wilson's notion of the "culminating and final war for human liberty." This is why the corporal's mutiny is not successful in the novel, as he is hung on the cross by the French General, his own father, with his followers all captured. Also, another mutiny, which is led by a British runner, fails with a number of soldiers killed by air raids. These examples corroborate Faulkner's hardcore realism that "man may finally have to mobilize himself and arm himself with the implements of war to put an end to war." *A Fable*, unlike Faulkner's earlier and more modernist works, does not represent the world of modernist ideals where "everything is there where it should be."

『ウィリアム・フォークナーの詩学』において，諏訪部浩一は*The Sound and the Fury*を取り上げ，その「（モダニスト的）美しさ」が「すべてが「あるべきところ」にある」という状態をほぼ完璧に実現したことによると説く（4）。なるほど，*The Sound and the Fury*をはじめとする“the major phase”を中心とする多くの作品を通じFaulkner が築き上げた“Yoknapatawpha”と呼ばれる壮大な幻想世界には，モダニズム的な理想郷が強く映し出される。一方，Faulknerにはこの条件から外れた作品もある。第一次世界大戦を描く“Ad Astra”や*A Fable*である。また，*The Portable Faulkner*収録の“1699-1945. Appendix”では，作家自らが*The Sound and the Fury*の完結性を壊そうと試みる。こうした作品は，Faulknerが描く物語世界では中心的役割を果たさない一方，ときにそれまでの解釈に疑問を突きつけ，新たなる読解の可能性を示す。読者にこれまでにはなかった問いを投げかける「余剰」のような存在，Faulkner作品が形作るはずの完成された世界からはみ出た存在，それが“Ad Astra”や*A Fable*，あるいは“1699-1945. Appeindix”の立ち位置といえる。本論では，こうしたFaulkner 作品にみられる余剰的存在に注目し，それが作家の築き上げてきたモダニスト的理想を単に壊すものであるのか，それともそれを補完しうるものであるのかを検討する。[2]

そこでまず，Faulkner自身が*The Sound and the Fury*について，「最も壮大な失敗作」であると論じた点に注目したい（FU 61）。さらに，彼は主人公Caddyについて，「美しすぎるがゆえに語らせることができなかった」とも述べている（1）。*The Sound and the Fury*をモダニズム文学の最高峰とみなすことになった後世の批評家にとって，こうしたコメントはある種のパラドックスを形作る。また，モダニズム美学の究極の完璧さが実は「欠如」から生じているという事実に気付かされる。「欠如」とはもちろん，Caddyという美しすぎるヒロインの声であり，彼女の主体性である。FaulknerがQuentinら典型的南部男性の言説を通じ，女性や有色人種・混血の存在を抑圧し，他者化するプロセスを批判的に浮かび上がらせてきたことは，諏訪部をはじめ多くの批評家が指摘するところだが（cf. 諏訪部 345，新田 41-42），Faulknerは*The Sound and the Fury*の執筆期にはすでに，モダニズム的美的価値がマイノリティーの抑圧を前提に築かれていることを承知していた。つまり，本来ならば「ある」べき存在が象徴的に「欠如」の記号として「あ

る」がゆえに成り立つのがモダニズムの美学ということを意識しつつ，Faulknerはこの作品を，とりわけCaddyを描いていた。

一方，この「欠如」を補うべく，Faulknerは後に*The Sound and the Fury*に付した“Appendix”（1945）において，ドイツ人将校とスタイリッシュなオープンカーでランデブーするCaddyを描いた。田川幸二郎は中年になってもなおかつ奔放なCaddyの姿をTruman Capoteのヒロイン，*A Breakfast at Tiffany's*（1958）のHolly Golightlyと比較し，「清潔感のあるプレイガール」（77）と呼ぶ。短い“Appendix”からは，果たしてCaddyが強い権力になびく女性なのか，それともレジスタンスの一員としてナチス将校に近づくスパイなのかを判読することは不可能だが（Brinkmeyer 198），作家が過去に築いた自己完結的世界にくさびを入れ，新たな物語を紡ぎ出そうとしていることは間違いない。“Appendix”においてもCaddy自身が自ら語るという状況にはないが，*The Sound and the Fury*本編では男性の近親相姦的な視線にくぎ付けにされていたCaddyを，“Appendix”では中年の独身女性図書館員に語らせる配慮をFaulknerは示す。自由奔放なCaddyとは対照的ではあるが，Caddy同様に伝統的南部社会の家族制度から逸脱した女性が「語る主体」として機能していることからも（Brinkmeyer 199），Faulknerが過去に残した「欠如」をなんらかの形で埋め合わせようとしている様相が見てとれる。*The Sound and the Fury*本編では「欠如」をモダニズム美学を生む仕掛けとして最大限に利用したFaulknerだったが，”Appendix”ではすでに完璧に仕上がった作品になにかを付け加えることにより，モダニズム的な美的価値を批判的に解体しようと試みる。後期Faulknerにとっては，「欠如」に代わり「余剰」が大きなテーマとなる。

＊　　＊

こうした視点からFaulkner作品を読み返すとき，アメリカ南部を舞台とする“Yoknapatawpha”連作よりも，“Ad Astra”（1918）や*A Fable*（1954）といった作品が気になる。執筆時期が大きく異なる二作だが，ともに第一次世界大戦時のヨーロッパを舞台とし，登場人物の一部を通じてアメリカ，とりわけ南部とのつながりが描かれる。また，両作品とも人種の多様性を意識させるサブプロットをもつ。例えば，“Ad Astra”で描かれるインド人兵士と白人兵士らの関係からは，

すでにこの時期Faulknerが南部という枠組みを超えたより広義の人種問題を意識していた可能性が示唆される。[3] 一方，*A Fable*においては，セネガル兵をはじめ第一次世界大戦に駆り出されたフランスの傭兵たちの存在が西洋史における人種的混合の可能性を示唆する。[4] また，*A Fable*では，元帥と対峙する伍長の異母姉妹の存在を通じて，女性の立場にも強い関心が示される。

こうしたテーマ上の類似をもつ“Ad Astra”と*A Fable*だが，短篇と長編というスケールの違いを含め，大きな違いも存在する。とくに両作品におけるアメリカ南部の位置づけはかなり異なったものである。“Ad Astra”においては南部，あるいはアメリカは語り手やSartorisといった登場人物を通じ，遠く背景として用いられているにすぎない。物語はオックスフォード出のアメリカ人兵士Blandとやはりオックスフォードで教育を受けたインド人兵士の関係を主軸に展開し，そこにアメリカ社会における人種意識を隠喩的に読みとることが期待されるにすぎない。一方，*A Fable*においては，元帥と彼の隠し子である伍長の生死をめぐる倫理的葛藤と戦争の意味が物語のプロットを支える一方，作品に先行し*Notes on a Horsethief*（1951）として発表された南部の競走馬をめぐる物語が，作品の入れ子構造として重要な役割をもつ。すなわち，黒人牧師Sutterfieldら*Notes on a Horsethief*の登場人物たちは戦場を舞台とする主たるプロットに折り込まれ，その展開をも左右する。その意味では，アメリカ南部は*A Fable*の単なる背景でもなければ，遠回しに描かれる隠喩的世界でもない。*A Fable*において，アメリカは「欠如」の記号ではなく，むしろ「余剰」として作用する。[5]

あるいは，第一次世界大戦というヨーロッパの戦争を語る*A Fable*において，むしろヨーロッパこそが「余剰」であり，元帥と伍長こそが作品の「余剰」なのかもしれない。作家が「すべてが「あるべきところ」にある」状況を意識し，それを忠実に再現した*The Sound and the Fury*とは違い，Faulkner自身が「欠如」と「余剰」の関係をある意味もて余しているのが*A Fable*という小説の魅力であり，そのことが同時にこの作品の難しさやわかりにくさになっている。別の言葉で言えば，「欠如」から出発し，それを埋めるための様々な仕掛けを行使するモダニズム美学の方法論が，不在の犯人追跡に乗り出す探偵小説のようにわかりやすいプロットを持つのに対し，すでにそうした仕掛けが破綻し，残されたもの（余

剰）が根無し草のように浮遊する*A Fable*の小説世界は，混沌とした，理解しがたいものとなる。

その一例として，軍隊という巨大な機構を相手に休戦を唱えるキリスト者たる伍長を物語の中心に据えながらも，また，その伍長に倣いくり返し戦争を放棄しようと試みる伝令ら一般兵士を描きながらも，Faulknerはこの作品を「平和主義の本ではない」と宣言する。*A Fable*出版前に，カバー折り返し用の宣伝文として書かれ，結局お蔵入りとなった“A Note on *A Fable*”（1953）には，平和主義は「機能せず，戦争を生み出す力の前に無力である」ことを示すのが，*A Fable*の目的であるとすら書かれている。宣伝文を通じて自らの作品を過剰に脚色するのは，「余剰」のひとつであろう。では，どうすれば人は戦争をなくすことができるのか。Faulknerは次のように述べる。

> [...] if this book had any aim or moral [...], it was to show by poetic analogy, allegory, that pacifism does not work; that to put an end to war, man must either find or invent something more powerful than war and man's aptitude for belligerence and his thirst for power at any cost, or use the fire itself to fight and destroy the fire with; <u>that man may finally have to mobilize himself and arm himself with the implements of war to put an end to war; that the mistake we have consistently made is setting nation against nation or political ideology against ideology to stop war; that the men who do not want war may have to arm themselves as for war, and defeat by the methods of war the alliances of power which hold to the obsolete belief in the validity of war</u> [...]. (My emphasis *A Faulkner Miscellany* 162-63)

この屈折した理想主義，超現実的な平和主義とも呼びえるFaulknerの「余剰」としての「平和主義」，あるいは「平和主義」という現代におけるある種の「余剰」は，*A Fable*出版当時すでにはじまっていた米ソ冷戦の構造的破綻を予見すると同時に，Woodrow Wilsonが第一次世界大戦参戦の際に訴えた「すべての戦争を終わらせるための戦争」，すなわち「民主主義」のための最終戦争を思わせる内容といえる。[6]

一方，*A Fable*における人間観を取り上げれば，同じ宣伝文においてFaulknerは，「三人の登場人物が人間の良心の三位一体」をあらわすことを指摘する。「若きイギリス人パイロット，Levineは虚無的」であり，「年老いたフランス軍主計総監は受動的」であり，「イギリス歩兵大隊付き伝令は行動的」であるという。もう少し具体的に述べれば，Levineは悪に対しそれを否定するために自ら命を絶つ。主計総監は悪が存在する限りその存在に堪え忍び，世界と共に悪の存在を悲しむ。一方，自ら起こした謀反ゆえに半身を失った「動く傷跡」たる伝令は，「世界に悪が存在するのなら，それをなんとかしよう」と試みる（163）。ここでFaulknerが述べる「悪」とは，人間性を顧みない軍事機構，第一次世界大戦時にすでに形成されはじめ冷戦期に完成するいわゆる軍産複合体のことと解釈できるが，興味深いのは作家が元帥と伍長の関係ではなく，他の登場人物を作品理解のポイントとして挙げている点であろう。これもある種の「余剰」といえる。しかもこれら三人への特別な視線が「余剰」なのか，元帥と伍長の存在が「余剰」なのか判然としない。一方，先に示した超現実的平和主義という視点から見れば，これら三人の登場人物のなかでFaulknerの立場に近いといえるのは，死を選んだ理想主義者Levineではなく，行動を起こすことができない無力な主計総監でもなく，傷つき焼けただれながらも声を上げて生き続ける伝令ではなかろうか。

その伝令に注目してみれば，無惨にも失敗に終わった反乱ゆえに半身「傷跡のかたまり」と化してしまう。そして，“Tomorrow”と題された最終章では，軍の規律を尊守し一人息子の伍長をすら処刑した軍産複合体の頂点に立つ元帥の葬列に乱入する。

> At which moment there was a sudden movement, surge, in the crowd to one side; the hats and capes and lifted batons of policemen could be seen struggling toward the disturbance. But before they could reach it, something burst suddenly out of the crowd—not a man but a mobile and upright scar, on crutches, he had one arm and one leg, one entire side of his hatless head was one hairless eyeless and earless sear, he wore a filthy dinner jacket from the left breast of which depended on their barber-pole ribbons a British Military Cross and Distinguished Conduct Medal, and

a French *Médaille Militaire*. . . . (435)

奇跡的に維持された半身に対し，「目がなく，耳もない火傷の跡」となったもう片方の身体は，Sutterfieldらの意見や存在を無視して，「休戦＝平和」の実現という自らの理念を追求し，他者を目的達成のために利用したことへの戒めと理解できるかもしれない。確かに，多くの仲間を死に追いやった伝令の行為について批判的に論じる批評家は少なくない。[7] その一方で，Barbara Laddは伝令の身体を「西洋的（＝目的論的）歴史認識が潜在的に保持する破壊的力（＝戦争）」と「身体の持続（＝永続）性」が「衝突する場所」と好意的に解釈する（“William Faulkner” 45）。西洋文明の理想主義的暴力が産んだこの「傷跡」（＝伝令）を，人間的機能を失い言説化することができない「欠如」の記号としてではなく，Faulknerが作品に残した可能性のひとつ，人間存在の「余剰」と受け止めることはできないだろうか。

本稿では，ここまでFaulkner作品における「余剰」に焦点をあて，論を展開してきた。後期Faulkner作品に見られる「余剰」が，作家自らがすでに完成した「欠如」の美学を批判的に再考するための仕掛けであることを確認するのが目的である。しかし，これは後期Faulkner作品において「欠如」がまったく機能していないということではない。事実，第二次世界大戦開戦を追って執筆をはじめ，冷戦期の真っ直中に出版されたにもかかわらず第一次世界大戦を舞台とする*A Fable*においては，第二次世界大戦の存在が大きな「欠如」として作用する。すでに*The Sound and the Fury*の“Appendix”において，あるいは*Go Down, Moses*（1942）といった作品において，Hitlerないしはナチス・ドイツへの批判的言及があるにもかかわらず，また*A Fable*においてはドイツ軍をくり返し否定的に描いているにもかかわらず，物語は冷戦期にいまだ影を落とす直近の戦争ではなく，“Great War”とノスタルジックに形容される第一次世界大戦を舞台とする。

確かに，ハリウッドの映画監督 Henry Hathaway のアイディア「無名戦士がキリストだったら」というテーゼから出発し（Blotner 452），キリストの受難をトピックとする作品においては，その設定が第二次世界大戦である必要はない。また，戦争犠牲者たちがフランス，イギリス，アメリカで「無名戦士」として弔

われるようになったのが第一次世界大戦後であったという史実をかえりみれば（Ladd, *Resisting* 88），Faulknerが*A Fable*の舞台を第一次世界大戦に置いたことは決して間違っていない。一方で，当時のFaulknerの関心事が，ノーベル賞受賞演説等に見られるように，「自由」と「平和」を守ることにあったのだとすれば，また，*A Fable*発表の翌年に*Harper's Magazine*に掲載された論評“On Privacy the American Dream: What Happened to It”（1955）におけるように，戦後アメリカ社会における全体主義的傾向を作家が真剣に案じていたのだとすれば，ファシズムの脅威と対峙した第二次世界大戦を舞台にするのも等しく適切な選択ではなかったろうか。

さらに，第二次世界大戦開戦時，Faulknerはナチスへの批判的言及に加え，日本軍のパールハーバー攻撃がアメリカの自由と民主主義を脅かすものだとくり返し批判的に描いてきた（cf.“Two Soldiers”（1942），“Shall Not Perish”（1942））。そして，妻の連れ子Malcolm A. Franklinに戦争へ行くことを勧める1942年12月５日付けの手紙（*Selected Letters* 166）など，Faulknerの第二次世界大戦への関心がかつての第一次世界大戦への関心同様にとても高かったことは間違いない。にもかかわらず，Faulknerは*A Fable*の舞台を第一次世界大戦とした。その後も1962年に没するまで多くの作品を精力的に書き続け，ノーベル章受賞者として，あるいは国務省の親善大使として世界各国で自由と平和を訴えたにもかかわらず，第二次世界大戦は最後までFaulkner作品の主要トピックにはならなかった。

一方，近年の*A Fable*研究では，Richard Goddenが伍長を“an unnamed Jew”と見なし，13人の謀反兵の存在にユダヤ性を読みとることで，この物語をホロコーストの隠喩と捉えようと試みる論もある（169）。いわば*A Fable*が第二次世界大戦の「寓話」であるという主張である。確かに13人の謀反兵については，作品中くり返し彼らの民族的他者性が強調され（*A Fable* 681，783-84/19，115），伍長の出自については，彼がチベットで生まれたのみならず，彼の出生と同時に亡くなった母親が彼の地においても異質な存在であったことが娘たちによって明かされる（931/253）。[8] これらは，伍長のユダヤ性を示す傍証ではあるが，一方でGodden自身が認めるように，*A Fable*においてユダヤ性は半ば不可視の記号であり，はっきりと明示されるものではない。[9] 但し，これがまったく不在の記号であるかと

いえばそうではなく，気がつけばテクストに散見される「余剰」として働く。

よって多くの批評家の指摘にあるように，作家自ら兵役を志願したものの実戦参加の叶わなかった第一次世界大戦を舞台としながらも，Faulknerの視線はむしろ第二次世界大戦に向いていたことはほぼ間違いない。[10] Faulknerにしてみれば第二次世界大戦をテーマとしつつも，なにかが妨げとなった結果生まれたのが*A Fable*であったのだろう。実のところ，Marianna Torgovnickが論じるように，第二次世界大戦を描く英語圏文学作品は思いのほか少ない。また，アウシュヴィッツをはじめとするユダヤ人強制収容所の問題とならび，第二次世界大戦における倫理的問題の原点である原爆について語ることも半ば意図的に避けられてきた(95)。結果，第二次世界大戦を描く作品においてすら，戦争そのものや戦争犠牲者を描くことが遠回しに行われる。その一例としてTorgovnickが挙げるのはMichael Ondaatjeの *The English Patient*（1992；film 1996）である。Torgovnick はAlmasyの焼けただれた肉体を第二次世界大戦犠牲者の「シンボル」と見なし，さらに映画版冒頭の閃光のような光を原爆のイメージと置き換えようと試みるが(105-06)，第二次世界大戦末期，より正確にいえばヨーロッパ戦終了後のイタリアを舞台とする作品において，太平洋戦争の終結，とりわけ広島・長崎への原爆投下は物語の重要な背景となりうる。三杉圭子がこの点を捉え，Almasyの「焼け焦げた身体」は原爆表象の隠喩としても働くと指摘する所以である(223)。この人間的機能を失ったAlmasyの身体の原型を，Faulknerが描く伝令のブラックホールのような半身に求めることはできないだろうか。

第一次世界大戦に従軍することを望みながらもそれを果たせなかったFaulknerには，アメリカにとって第二次世界大戦もまた理想と正義のための戦争であって欲しいという願いがあったのに違いない。しかし，現実にはアメリカが第二次世界大戦で起こした軍事行動には，そうした願いとはかけ離れた部分があった。広島・長崎への原爆投下はその一例であろう。パールハーバーに憤ったFaulknerが，戦後はむしろ日本への同情をくり返し言葉にしたのはそのためかもしれない。[11] 目下の戦争に勝利するために，また冷戦時代における軍事・政治的優位を得るためにアメリカが原爆を使用したことは，倫理的には否定されてしかるべきものだった。そのことが，ノーベル賞受賞者の肩書きとともに親善大使として各

国でアメリカ民主主義の理想を説いて回ることになるFaulknerにとって，第二次世界大戦を直接のテーマとして描くことを躊躇せざるを得なかった理由なのではあるまいか。

＊　　＊

そもそも着想のきっかけがハリウッドでの映画制作においてHenry Hathaway監督のもちだした原案にあったということからも，*A Fable*という物語はFaulkner作品のなかでは異質，まさに「余剰」そのものだった。加えて，第二次世界大戦を戦ったアメリカや当時の国際社会に訴える内容でありながら，Faulkner自身が美化しやすい第一次世界大戦を舞台とすることも，この作品の複雑さというより，作家自身の複雑な価値観をあらわしているように思われる。*A Fable*という作品は，第二次世界大戦というFaulkner作品の「欠如」を埋める「余剰」的物語として，戦後アメリカが抱える様々な問題を隠喩的にあらわす作品なのである。

1　本論は第84回日本英文学会（2012年５月27日於・専修大学）におけるシンポジウム「「偉大」な小説とは何か―没後50年のフォークナー」における拙稿「Faulknerにおける「偉大」さと余剰」をもとに加筆したものである。

2　もう少し丁寧にいえば，諏訪部が述べるように，1930年代以降のFaulknerにとって，とりわけ*Absalom, Absalom!* において，「Faulknerが（自己）批判しているもの」が「モダニスト的デザイン」である（340）。*The Sound and the Fury*に見られる「すべてが「あるべきところ」にある」状態を自己解体することが，後期Faulknerの真骨頂であったのなら，作家自身に倣いFaulknerが築き上げたモダニズム的「完璧」さを批判的に再検証するのが本論の目的である。

3　“Ad Astra”における人種の力学関係については，Martinを参照のこと。一方，作品外におけるFaulknerの人種意識については，南部における黒人へのリンチを擁護するきわめてセンセーショナルな*Memphis Commercial-Appeal*誌への1931年２月15日付の手紙（McMillen ande Polk）や1956年のRussell Howeとのインタビューにおける「強制的な人種融合も人種隔離も望んでいない」という意味深なコメントが有名だが（*Lion in the Garden* 260），本論では作品外におけるFaulknerの人種的発言はあえて射程外に置く。この問題については，Townerの論考などすでに一定の解釈が加えられているのでそちらを参照されたい。

4　多国籍化が進む軍隊組織の様相は，伍長に続き二つめの反乱を起こそうと企む伝令の言葉からも明らかである。“It's like another front, manned by all the troops in the three forces who cant speak the language belonging to the coat they came up from under the equator and half around the world to die in, in the cold and the wet—Senegalese and Moroccans and Kurds and Chinese and Malays and Indians—Polynesian Melanesian Mongol and Negor who couldn't understand the

password nor read the pass either: only to recognise perhaps by memorised rote that one cryptic hieroglyph... Before, the faces behind the machine guns and the rifles at least thought Caucasian thoughts even if they didn't speak English or French or American; now they dont even think Caucasian thoughts. They're alien. They dont even have to care."（317-18）

5 自らの息子伍長を説得するにあたり，元帥が持ち出す物語もまたアメリカを舞台とする。ミシシッピで殺人を犯した死刑囚の話は，生きることの寓意的な意味を示唆する（cf. 350-51）。

6 Gragnon師団長暗殺を仕切るアメリカ人兵士Buchwaldはその任務に志願した理由を，「Wilsonを愛しているからだ」と述べ，その人物が「軍の最高の軍曹」である「Wilson軍曹」とは別人物であることを示唆する（375）。一見皮肉ともとれる箇所だが，Faulknerの真意については図りかねるところでもある。この点についてMieszkowskiは*A Fable*とは，第一次世界大戦を「すべての戦争を終わらせるための戦争」であると同時に「現代的な軍事機構創設」の瞬間という二つのイデオロギー的側面からとらえ直す試みであると評価する（212）。

7 同様に，伍長においても元帥においても，各々の理想を追求するという意味では，典型的な目的論的理想主義者であり，Faulknerが伍長の理想に死をもって応えたという点は注目に値する。理想というある種の暴力的形而上学のもつ欠点をどう補うことができるのか。この作品を通じて，Faulknerが読者に問う究極の倫理的問題である。

8 戦争に人生を賭けた若きイギリス人パイロット（Gerald David Levine）がその名前ゆえにユダヤ的出自をもつことや，謀反を抑えることができなかったフランス人師団長（General Gragnon）を暗殺するアメリカ人兵士の一人がロシア系アメリカ人であるばかりか，第二次世界大戦時のユダヤ人強制収容所のひとつBuchenwaldを想起させるBuchwaldという名前であること（Godden 165）などが，この作品のユダヤ性を示す傍証として提示される。また，伍長の意志を受け継ぎ，二度目の謀反を起こした伝令がくり返し引用するChiristopher Marlowe（1564-93）の一節は，*The Jew of Malta*からである（*A Fable* 730，742; Godden 187）。

9 Godden自身次のように述べる："Arguably, the "something" in the mother is her Jewishness. / I say "arguably" because the clues are few, cryptic and easily missed"（170）.

10 Ladd は*A Fable*がFaulkner作品のなかでも「広島以後」の世界観に取り組む「最良」の作品と評価する（*Resisting History* 80）。また，Mieszkowski はこの作品を「第二次世界大戦後にアメリカが直面する政治的状況」のなかに位置づけられると指摘する（212）。

11 *A Fable*出版の翌年日本を訪れたFaulknerは，滞在中の質疑のなかで幾度となく戦後の日本を南北戦争再建期の南部と重ね合わせている（Blotner 607）。

参考文献

Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. One-Volume Ed. 1984. New York: Random-Vintage, 1991.

Brinkmeyer, Jr., Robert H. *The Fourth Ghost: White Southern Writers and European Fascism, 1930-1950*. Baton Rouge: Lousiana State UP, 2009.

Faulkner, William. *A Fable*. New York: Random House, 1954.

——. *A Faulkner Miscellany*. Ed. James B. Meriwethr. Jackson: UP of Mississippi, 1974.

——. "Ad Astra." *Collected Stories of William Faulkner.* New York: Random-Vintage, 1995. 407-29.

——. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Ed.

Frederick L. Gwynn and Joseph Blotner. New York: Vintage, 1959.
——. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962*. Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random House, 1968.
——. *Notes on a Horsethief*. Greenville, Miss: Levee Press, 1951.
——. "1699-1945. Appendix: The Compsons." *The Portable Faulkner*. Ed. Malcolm Cowley. 1946, 1966, 1967. New York: Penguin, 2003.
——. *Selected Letters of William Faulkner*. Ed. Joseph Blotner. New York: Random House, 1968.
——. *The Sound and the Fury*. 1929. New York: Vintage, 1990.
Godden, Richard. *William Faulkner: An Economy of Complex Words*. Princeton: Princeton UP, 2007.
Ladd, Barbara. *Resisting History: Gender, Modernity, and Authorship in William Faulkner, Zora Neale Hurston, and Eudora Welty*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2007.
——. "William Faulkner, Edouard Glissant, and a Creole Poetics of History and Body in *Absalom, Absalom! and A Fable*." *Faulkner in the Twenty-First Century: Faulkner and Yoknapatawpha, 2000*. Ed. Robert W. Hamblin and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 2003.
Martin, Reginald. "Faulkner's Southern reflections: the black on the back of the mirror in 'Ad Astra.' —William Faulkner—Section 1: Black South Culture." *African American Review*. Spr. 1993. FindArticles.com. 29 Oct. 2011.
McMillen, Neil R. and Noel Polk. "Faulkner on Lynching." *The Faulkner Journal* 8.1 (1992): 3-14.
Mieszkowski, Jan. "Great War, Cold War, Total War." *MODERNISM*/modernity 16.2 (2009): 211-28.
Misugi, Keiko. Response to Miura Reiichi's "Liberalism's Everbody's Revolution: Cultural Politics in *The Catcher in the Rye*." *Nanzn Review of American Studies* 32 (2010): 221-26.
Torgovnick, Marianna. *The War Complex: World War II in Our Time*. Chicago: U of Chicago P, 2005.
Towner, Theresa M. *Faulkner on the Color Line: The Later Novels*. Jackson: UP of Mississippi, 2000.
金澤哲『Faulknerの『寓話』—無名兵士の遺したもの』あぽろん社，2007.
諏訪部浩一『ウィリアム・Faulknerの詩学1930－36』松柏社，2008.
新田啓子「混血の情動—自我と宿命の狭間にて」『Faulkner』vol. 12 (2010)：40-56.
田川幸二朗「Faulknerとミルハウザー —逃げ去る女性と自動人形」『Faulkner』vol. 12 (2010)：72-91.